

梅花短大 家本 修 大谷女短大 ○小林昭子

樟蔭東女短大 山本倫子 鳴門教大 広瀬月江 滋賀女短大 成田巳代子

目的 幼児の発達段階において被服の嗜好性は、母子関係から影響を受けるのであるか。被服の嗜好性の構成においてその過程を明らかにすることは、重要な課題と考えられる。本研究は、母子間における被服の嗜好性に着目しその関係と法則性を求める。本報では、幼児における被服色彩の嗜好性や母親から見た嗜好性との関係を検討した。

方法 幼稚園児（3歳～6歳）とその母親を対象に図形や色彩の嗜好性についての調査を実施した。調査対象数は、115組で幼児と母親に同一ナンバーの調査用紙を用いて、幼児には面接調査を母親に配票留置法により行った。実施数は、115組で回収率は100%である。調査地域は、東大阪市内、滋賀県下、徳島県下の各幼稚園である。調査時期は、昭和61年11月～12月上旬。実施場所は、各幼稚園の教室である。幼児は面接により調査員が用紙に記入した。また同時に型や模様を提示し認識度合いを検討し、質問を理解していることを把握した。一方母親には、子供の嗜好について回答してもらった。主たる調査項目は、基本属性（年齢、兄弟、他）、本人の色関係の項目（好きな色、嫌いな色、着たい服の色、他）、母親から見た子供の嗜好関係の項目（本人と同じ）で構成した。

結果 ①男児の嗜好色は、赤（14.0%）緑（15.8%）紺（31.6%）であり、女児はピンク（58.1%）赤（14.0%）であった。②赤の好きな幼児はピンクの好きな幼児に比べ母親は「活発」と見ている。③：幼児の好きな色と母親の着せたい色では一致するのは約30%以下である。④：母親から見て似合う服の色と幼児本人の好きな色はほぼ一致した。性格との関係が示唆され、母親の認識に影響を与えているようである。